

巻頭エッセイ

近代日本の郵政官僚に関する覚書

石井 寛治

1 近代日本政治における官僚制

この研究紀要も、2010年3月の創刊以来13号を数えるに至り、筆者は編集委員会の一員として郵政歴史文化研究会のメンバーの研究成果の掲載を推進してきたが、自分で論文を執筆することは少なく、主として後輩の専門研究者との研究会での議論から多くのことを学んできた。とはいえ、最近になって前島密（1835～1919）に関連するシンポジウムにおいて石井寛治「幕臣たちの文明開化」（2019）、同「文明開化の担い手たち—前島密の位置」（2020a）と題する報告を行い、郵政官僚の元祖たる前島について論じた。また、郵便史研究会の機関誌『郵便史研究』に、「三等郵便局長の経済的地位」（2020b）と題する郵政官僚の広大な底辺部分に関する論考を発表した。さらに、一昨年来のコロナ禍のために自宅に籠った時間を活用して、弟姉と石井寛治編『石井家の人びと—「仕事人間」を超えて』（2021）を執筆し、郵政技術官僚であった父石井浅八の生涯を論ずる機会をもった。

ここでは、それらの論考を書くことを通じて知った郵政官僚の働き方を中心とした生きざまについての知見を、彼らの伝記類などを手掛かりに膨らませて、近代日本社会を構成する三大階層（政治家、官僚、民衆）のうち戦前の郵政官僚の行動とエートスの特徴について覚書風に述べてみたいと思う。ただし、史料上の制約から、ここでは、通信官僚のうち局長クラス以上の高級官僚を対象を絞ることをお断りしたい。

上述の前島関連のシンポジウムでは、江戸幕府を倒した薩摩や長州の西南雄藩の出身者が、明治政府の権力をしっかりと把握して、新しい国造りを行ったという「薩長中心史観」を批判し、明治初年には上級官僚の主要ポストは西南雄藩が押さえているのに対して、大多数を占める下級官僚の3分の1は旧幕臣であるとのデータ（石塚裕道 1973）を示しつつ、「技術・実務官僚、軍事官僚としての旧幕臣層が、大久保体制を幅広くささえていた」（田中彰 1976）と指摘されていることを重視すべきだと述べた。大隈重信は、そうした旧幕臣の実務官僚中の前島密と渋沢栄一をとくに「両英傑」と呼んで高く評価している（前島密 1920）。両者のうち渋沢栄一は、預金額で見て三井銀行に次ぐ日本第二の地位を明治期一杯守り続けた第一（国立）銀行の頭取として数多くの近代企業を起こし、「日本資本主義の父」と呼ばれる著名人であるのに対して、「郵便の父」と言われる前島については、郵便局関係者の尊敬を一身に集めているけれども、郵便に興味を持たないひとにはあまり知られていないであろう。しかし、前島は先に引用した「大久保〔利通〕体制」のもとで「駅通」機構のトップを務めており、通信だけでなく運輸一般も担当し、三菱会社への政府助成のプランを立てた責任者でもあった（山口修 1990）。三菱財閥の創設を政府官僚として援助した点では、渋沢とある意味で対比できる人物だと言ってよかろう。

ただし、このように旧幕臣が実務官僚として活躍したことが、藩閥官僚の人手不足を彼らが補ったという話だけでは、近代日本の官僚の出自調べに終わってしまい、あまり新味のある話

にはならない。近代日本の政治世界で、官僚層がなぜ重要な位置を占めていたかが先ず問題とされなければなるまい。その点で言えば、上述した近代日本の三大階層に含まれる支配階層としての政治家と官僚のうち、薩摩・長州出身の藩閥政治家が、戊辰戦争の結果として東京の中央政府で急に高い地位に就いたために政治家としての実力と倫理を身に付ける余裕もないまま政治活動を担わなければならなかったため、実質的には官僚層の提言に依存してしか活動できなかったことが注目されよう。同様なことは、帝国議会の議員として政治活動を始める際の政治家層と、中央集権的な官僚組織の一員として帝国大学を卒業して政策の立案と執行に携わるようになる官僚層の能力と実績を比較した場合にもある程度当てはまるように思われる。もっとも、こうした大雑把な断定は単なる印象にもとづく仮説に過ぎず、本来ならばきちんとした実証によって裏付けられなければならないが、ここでは取り敢えずの感想としてそのように述べさせて頂こう。

ただし、そうした官僚層の大きな役割は、結果として生まれただけでなく、大日本帝国憲法が制定される過程で、近代日本政治のシステムをいかなるものとして構築するかという模索の中で重要視されていたことが留意されなければならない。この点を文明論の視野に立ちながら、憲法制定の諸構想の問題として論じたものとして瀧井一博（2003）の興味深い論考がある。同書によれば、1882年3月から翌83年8月にかけて、伊藤博文がヨーロッパに滞在して憲法の政府案を練り上げようとした際に、すでにイギリス流の政党政治論に立つ大隈重信の憲法意見書（小野梓執筆）とプロシア流の超然的君主論に立つ岩倉具視の憲法意見書（井上毅執筆）があって、政府としては後者の線での憲法案を準備中であったため、伊藤は独自のリーダーシップを如何に発揮するか悩み抜いていた。伊藤の苦悩は、最初に師事したベルリン大学の憲法学者グナイストからの講義が、日本は憲法を作ったとしても議会での合意を得ることは難しいとして憲法制定に消極的であったため深まるばかりであった。そうした伊藤の窮地を一挙に救ったのは、ウィーン大学の国家学者シュタインの唱える、立法部や君主制の専制を退けるための高い自律性をもった行政部＝官僚こそが、現実に対応して日々の問題を処理し、秩序形成に貢献するという「進化論的」国家論の教えであった。伊藤は、議会政治を漸進的に日本に定着させるためには、自律性をもった行政システムと、議会が破綻した際に救済する立憲君主の役割とが重要であることを、シュタインに学びつつ理解したのである。1886年の帝国大学令の公布は、そうした近代官僚制を支える人材のリクルートシステムの構築作業であったことは言うまでもあるまい。

こうして出現した近代日本の政治システムは、伊藤が見通したように官僚制に支えられた議会制度を基礎に政党内閣制を生み出すまでになった。しかし、若月剛史（2014）によれば、1920年代になると、官僚制の専門化が進んだことに伴い増加するその要求に対応できないだけでなく逆に行政整理を迫る政党内閣に対して官僚の反発が表面化したという。かつては議会制度の安定要因であった官僚制が、逆に議会制度を動揺させる対立要因に変わったというのである。もちろん、1920年代以降の場合は、もっとも不満を累積していたのは軍縮ムードに対する軍人官僚たちであることは、若月上掲書は当然の前提としており、その上で政党内閣と文人官僚の対立局面を問題としているに過ぎない。しかし、満洲事変と昭和恐慌という複合的危機に対して政党内閣が何故有効な対応を見せずに崩壊したかを考えようとする場合に、官僚制の変容の理由と意味を突き止めることは重要な課題と言わねばなるまい。本稿は、そうした近代日本の政治システムの成立と崩壊を、官僚制を担った人々の具体的活動とエートスを追う形でエッセイ風に明らかにしてみたい。

2 郵政官僚の専門と教養

〔前島密1835～1919〕

前島密は、1835年に越後国の豪農上野家の次男に生まれ、幼くして父を失い、士分の出である母親の手で厳しく育てられた。江戸で本を書き写す筆耕のアルバイトなどしながら開明的な儒学者安積良斎の下で学び、幕府の海軍操練所で航海術を教わり、1862年からは長崎のアメリカ宣教師から英語と数学を学ぶとともにアメリカの歴史書『聯邦志略』の漢訳を読んで開国派となった。1866年に幕臣前島家を継いで幕府開成所の反訳方となり、1870年から、明治政府の民部省改正掛として大活躍する（井上卓朗 2020）。前島が実務官僚として大きな役割を果たすことができた理由の一つとして、「前島が武士・農民・商人の範疇に収まらないマージナル・マン（限界的階層者）出身者であったことが大きい」（田原啓祐 2019）と指摘されているが、そうやってよ



いであろう。幕末維新期の国家的危機に際しては、人材登用が何よりも必要とされ、幕府や諸藩では実力のある人物が所属や身分を問わずに登用されたのである。

前島の場合は、最初に述べたように、近代経済に必要なインフラストラクチャー造りの優れた能力を買われての登用であった。早くからの英語の勉強を通じて文明国の政治経済のあり方を把握してただけでなく、制度改革を実現するために必要な資金と人材を予め計算することが出来た点で、明治政府にとって欠かせない人物であった。前島の上司であった内務卿大久保利通は、「随分尤もらしき議論家もあるが、結局算数に至ると当れるものが少ない。そこに至ると、前島に於ては、総ての議論が算数に基いて居るから他に一頭地を抜くのである」（前島密 1920）と評したといわれるが、「算数」に基づく「議論」というのは、根拠のない希望的観測でなく、実際の現地視察を含めた経験的データを踏まえた企画の立案を指すものであろう。

そうした政策案を作り上げる場合に、前島は幾つかの企画を考案した上で、最終決定は上司である政治家の選択に任せた点で、近代的官僚としての限界をわきまえていた。1874年の台湾事件に際しての軍事輸送が中立を理由に外国に断られた苦い経験を踏まえた明治政府は、大久保内務卿が前島に作らせた海運策としての、①民営放任策、②民営育成策、③官営策の何れかを選ぶことになり、第二案に決定したが、それは三菱会社を育成する予定であった大久保・大隈構想に沿うものであった（岩崎家伝記刊行会編 1967）。このように前島は通信大臣になってもおかしくない功労者であったが、通信次官にしかなれなかったのは、前島の「出自のため」だというのが渋沢栄一の説明である。1881年の政変で大隈重信が伊藤博文らに敗れて下野すると、前島密もしばらく政府官僚を辞して、立憲改進黨の運営や東京専門学校（のちの早稲田大学）の経営に努めた。そうした協力者の前島を高く評価する大隈は、「前島君の地位を得たのは唯才幹と云ふばかりではない。また種々の事務が出来る事務屋と云ふばかりではない。矢張り政治的技術、夫れに伴ふ誠実なる人格を有って居った」（前島密 1920）と回顧している。前島の「誠実な人格」を支えたものとしては、前島が早くから禅宗に興味をもち、時に座禅を組み、好んで仏書を読んだことが指摘できよう。前島の女婿で早稲田大学の初代学長の高田早苗博士によれば、「禅学を素人がやるのは余程感情の強い人に多いようです。前島もそれと同様な訳で、非常に多感で、癡癪持ちで感情の強い人であった。それで自分の短所を補ふ為をやっ

たものと思ふ。原担山と云ふ禅学の大家について随分研究したさうですが、講釈禅になって終つて、大悟徹底したとはいへない」と説明している。しかし、大事なことは悟りを開くことよりも前島が仏教という普遍的価値に傾倒し、生き方の指針とした姿勢であつて、難解な教義をどこまで理解したかではないのである（石井寛治 2020a）。この点は、前島が郵政次官を辞任した1891年以降の前島の諸活動を含めての実証がなお必要であるが、前島が逓信官僚の元祖としてだけでなく模範として尊敬され続けている秘密はそうした生き方全体によるように思われる。

【坂野鉄次郎 1873～1952】

坂野鉄次郎は、田中次郎、下村宏とともに1898年に東京帝大法科大学を優秀な成績で卒業して逓信省に入り、激増する郵便業務に対応して業務の革新を行い、「逓信省の三人男」と呼ばれた。とくに坂野は「前島郵便を坂野郵便に立て直した」と言われるほどの根本的かつ合理的な業務改革を行い、郵便事業「中興の恩人」と称えられている。本人は、「逓信省に入ってみますと、何もかもしきたりで、仕事の基礎となる計画的な考えが一つもない。規定というものが全くない。これではいけない。しっかりした基礎のあるものにしてやらなければならない、とこう考えたのであります」（坂野翁伝記編纂会編 1952）と回顧している。



1903年に通信局内信課長、1906年～08年に同局企画課長となった坂野は、借り物の参謀本部地図に頼るのを止めて全国の集配郵便局長を動員して実地調査を行わせて通信地図規定と通信区画規定を作り、一等局と二、三等局とでバラバラであった集配時刻を一等局で集約する郵便集配規定を作ることによつて郵便物の送達時間を大幅に短縮した。坂野の指揮により、「営業採算の気風が興り、目の子算用から数学的・科学的になり、……中央指導部が強化され、指導原理が確立して、通信事業の新体制ができあがった」ときわめて高く評価されている。

坂野は、1873年に岡山県御津郡の大庄屋の長男に生まれ、1890年に進学した京都の第三高等中学では、「謹直で数学の得意な秀才であった」という。部下の追想でも「翁の計数的頭脳」のことが思い起こされ、「一切の立論を緻密なる計数的基礎に置く翁の規画が水も漏らさぬ精密さと磐石の如き確実性を有する」と指摘されている。それだけに部下の誤りに気の付くことが多く、それに対しては、「諄々と説き聞かせる方で無く、相当強い言葉で其誤謬又は不注意を指摘してその覚醒又は奮発を促すといふ遣り方をとつた」と言われ、「部下の者は雷親翁の尊称を奉つて居た」という。別の部下は、そうした坂野の態度を「名人気質」と呼び、「翁と世間との調和と矛盾の素因となつた」と批判する。「真実なるものへの執着が強すぎた。所詮、人間というもの全体の未完成をあまりにも強く意識し過ぎていたように思う。他の表現を以てすれば、儒教の長所であり弱点であるところの窮屈を、どちらかといえば、そのまま身につけて過ぎていたかも知れない」という批判は、坂野の先祖が規律に縛られた武士階級だったことを意識した批判であるのかも知れない。坂野が西部通信局長を最後に1915年、42歳の若さで逓信省を辞し、中国合同電気社長や貴族院多額納税議員となつたのは、ゴルフ場や料理屋での「遊び」を不可欠の条件としたといわれる当時の逓信省内の役人同士の付き合いに、本人としても限界を感じていたためであろう。

〔田中次郎 1873～1931〕

田中次郎は、「逓信省の三人男」のなかでは局長になるのがもっとも遅かったが、1911年に、省内最上のポストである通信局長になった。1873年に佐賀県の旧小城藩士で豪農の副島萬九郎の次男に生まれた次郎は、1878年から戸長を辞めて寺子屋を開いていた父の下で、四書五経などの素読を学び、熊本の第五高等中学を経て、大学進学を望んでいた。しかし、卒業までに1,000円掛かると言われ諦めかけた時に、愛媛県宇和島出身で秋田県警部長の田中義達の養子となって学費の目途がついたので、帝国大学文科大学哲学科へ進んだ。しかし、「哲学科では一世を風靡する大家にならなければつまらない。而してそれは天才でもない自分には不可能である。哲学科をやるからには、矢張りみじめな生活に追はれなければなるまい。平凡ながらも人に迷惑をかけないで己が生活の安定を得る為めには寧ろ法科を択ぼうと思った」次郎は、直ちに法科へ転科し、猛烈に勉強して好成績で卒業、1898年に逓信省に入った（田中義次編 1932）。大学卒業後間もなく、田中は『日本帝国憲法論』や『通信法積義』と題する著作を刊行しているから、法律の専門家としての力量もかなりの程度まで備えていたことが分かる。入省の年の高等文官試験では数倍の競争を潜り抜けた100名の合格者中、「逓信省三人男」は、下村4番、田中8番、坂野9番であったから、田中を含めた「三人組」は試験に強い能力をもっていたことは間違いない。



1899年に東京郵便電信局監理課長となった田中は、それこそ猛烈な勢いで働いた。自叙伝によれば、「色々な役員との面会、方々から掛けて来る電話、見る間に机上に山と積る書類、時々
の会談、さては東京市内二十以上の二等郵便局長を集めての談話やらで、リテラリーに〔文字通り〕眼のまはる有様であった。下には課員八十名を操縦し、一方東京府、千葉県、山梨県の郵便事務監督をやらなければならぬ。此の天下一の多忙の状態が十八ヶ月も続いた。自分の頭脳
のファンクションは少し異状を示して来た」という。幸い医師の診断に基づき、一週間程の休暇を貰って全快したが、生涯のうちでもっとも華やかであったこの時期の田中は、下手をすると過労死の先駆者となるころであった。恐らく坂野が実行しはじめた業務改革は、こうした際限ない無定形な忙しさをコントロールするための改革でもあったのであろう。

次に田中を待っていたのは、そうした国内業務の合理化でなく、1900年から1906年にかけての「京城郵便局長」として日露戦争前後の朝鮮の郵便と電信を極力日本の支配下に包摂するという面倒な仕事であった。その仕事が一段落してから2年間の欧米留学に出掛け、帰国後しばらくしてから通信局長に就任した。その前年に勅任官になった田中は、「之でやっと役人らしい役人になったといふ内心の喜びを頒つべく、国許の実母にも、又我が養父一家へも吉報を伝へた。近親の喜びの言を聞いて自分も官吏としての理想に近づいたやうな気がした」と述懐している。勅任官という天皇の官吏の最高ランクについて自分も位置づけられたかという喜びに浸っている田中にとって、数年後に逓信官僚としての仕事が突然奪われるとは全く予想もできなかったであろう。1917年に田中は通信局長を免ぜられ、日本石油に就職した。元逓信官僚の田健治郎が寺内内閣の通信大臣となるや、佐賀県出身の田中通信局長を大隈重信系統の人物と見なして翌17年にバツサリ辞職に追い込んだそうである。このエッセイの最初に引用したように議会制度を官僚制度が支えてきたのが、最後の超然内閣である寺内内閣の時期に、元逓信官

僚の田通相が派閥人事を持ち込んだのは時代錯誤とも言えるが、長期的に見た場合、官僚制が原内閣以降の政党内閣を生み出す議会制度を下から突き上げる対立要因となる方向を先取りしていたとも言えよう。

〔稲田三之助 1876～1952〕

稲田三之助は、1893年の官制改革で工務局が通信局の一課に格下げされてから32年経った1925年（大正14年）に、改めて工務局が設置された時、初代工務局長に就任した人物である。梶井剛（1968）は、「大正8、9年ごろに、われわれが工務局をつくってほしい、でなければ辞める辞めないと騒いだのが、この時代になって実現した」と述べているが、実際、逓信省における技術者の待遇はひどく低かったため、早々と官僚生活に見切りをつけて民間企業に天下るケースが多かった。交通通信技術は世界的にも日進月歩の変化を遂げており、逓信省内部における技術者の数は増加の一途を辿っていたが、自分より若い世代が役付けでは上位にあり、給与も自分達より多いことが常態だったのである。



1876年に名古屋の医師稲田見竜の三男として生まれた三之助は、一高を経て、1900年に東京帝大工科大学電気工学科を卒業、逓信省に入った。1905年から本省通信局で海底電線の敷設工事に従事し、1920年に通信局工務課長、1925年に工務局長となり、以後、1932年に退官するまで「通算して実に十三年間工務の総帥として君臨し」（進藤誠一 1960）、「内外無線通信網の整備、関東大震災直後における自動交換方式の導入、長距離ケーブルの建設、各種通信機器の国産化」（稲田三之助伝行会編 1965）に尽力したと評されている。逓信事務次官を1931～36年に務めた大橋八郎は、「稲田さんといえば、まず私の頭には仕事の鬼というような感じが浮ぶ。……仕事上の交渉に当たっても話がつれると小さな手帳をとり出して、細かい字でギッチリ一杯にくしゃくしゃに書いたのを見ながら、厳粛なしかめ面を紅潮させて熱心に議論を展開されるので、その仕事に対する熱情には頭が下ったものである」（同上 1965）と回顧している。

また、のちに名古屋大学教授となった金原淳は「文献の方は、何んな忙しい折でも、まず近着の海外雑誌に目を通された。めばしいものがあると、直ぐ若い者に読むことを命ぜられた。私は、ドイツの無線関係と、フランスの通信関係全域の文献を担当させられた。命ぜられてから、一週間位経つと、呼び出しが来て、説明をさせられる。御自身が納得の行く迄、徹底的に質される。それが了ると、要旨を簡潔に書かせて、整理筆筒に納めて居られた。従って常に世界の最尖端の研究や事実を握って居られた」（同上 1965）と述べている。後輩の技術者である松前重義は、こうした世界の最先端の技術動向を追いかける中から世界水準を凌駕する技術が生み出されたことを回顧しつつ、「稲田さんは、当時のわが国の技術の総帥として、敢然として、日本に於ける通信技術の歴史の曲り目を担当して、その進路を開拓された」（同上 1965）と高い評価を与えている。なお、子息の稲田竜一は、両親がいずれも熱心なキリスト教徒であり、稲田三之助は几帳面で一日の生活が時間表の通りであったことなどを回顧していることも付け加えておこう。

【大橋八郎 1885～1968】

次に、通信省内部から通信次官となった事例の一つとして、1910年に通信省に入った大橋八郎の場合を見よう。

1885年に富山県高岡の資産家の長男に生まれた大橋は、四高を経て東京帝大法科大学政治学科を卒業し、同郷の先輩の奨めで通信省を選んだという。卒業席次も高等文官試験も上位一割台の優秀な成績だったが、1910年の高等文官試験の合格者130名には通信省在籍者が23名もあり、省内での競争は激しかった。有竹修二稿『大橋八郎』(1970)によれば、大橋の昇進は次に引用するようにきわめて恵まれていた。すなわち、「大橋の通信省における昇進コースは、すこぶる恵まれたものであった。明治四十三年入省したときは、貯金局に配属されたが、貯金局長下村宏が、もっとも野心的に活躍した時代であり、この局ではぐくまれた簡



易保険事業の仕事が次第に形を整え、やがて貯金局保険部が新設されるとともに、田辺(治通)保険部長のもとに、課長としてその仕事の中枢に座し、ついで簡易保険局が創設されると、桑山〔鉄男〕局長のもとに、筆頭課長として同局の主軸となった。……この前歴と知識をもちながら、〔1925年に〕郵務局長となった大橋は、たちまち一般会計支配下における郵便事業の姿に矛盾を発見し、早くも『通信事業特別会計』の構想を打ちたてた。この構想は、後、斎藤内閣の南通相、大橋次官〔1931年6月～1936年1月〕のときに至って実現を見た」と記されている。

通信官僚としての大橋にとって最大の仕事は、1933年3月に通信事業を一般会計から自立させて特別会計にしたことであった。通信省は1885年の創設以来、郵便・電信・電話事業を中心に多額の利益をあげてきたが、その利益は一般会計に吸収されてしまい、現業部門の待遇改善や需要の多い電話開設を思うように実行できない悩みをもっていた。そのため、日清戦後から大蔵省を相手に特別会計化の交渉が繰り返されたが、貴重な収入源を失うことを恐れた大蔵省の強い反対に会って、なかなか実現しなかったのが、大橋通信次官の時期に漸く実現したのである。交渉の鍵となったのは高橋是清蔵相が大蔵省内部の反対を押さえて妥結に持込んだ決断にあるという説明がしばしばなされ、それ自体は誤りではないが、高橋の決断を余儀なくさせた切り札が、実は郵便貯金金利の大幅切り下げ問題であったことが見落とされてはならない。1927年の金融恐慌で巨額の郵便貯金を集めた通信省は高橋蔵相の低金利政策の成否を握る立場にまで成長していたのである。大橋は、のちに「何事も時である。時が万事を解決する」と禅問答のような説明をしているが、貯金局に配属されて以来、郵便貯金の増加を眺めてきた大橋は、これこそ大蔵省を打倒する絶好のカードになると気付いたに違いない。1932年6月20日に新任の通相南弘が蔵相高橋を尋ねた翌日の『東京朝日新聞』は「郵貯利下げに蔵相通相諒解成る、通信特別会計の設置を交換条件に」と報じたが、この時点で交渉は事実上決着していたと言っても過言ではない(石井寛治 2010)。

こうして見てくると、大橋のような貯金局出身の人物が順調な昇進コースを辿って次官となり、通信省の総力を結集して大蔵官僚との厳しい交渉をやりぬいたことの意義は大きかったと言えよう。千代子夫人に言わせると、大橋は「昔から仕事のことにはもう馬車馬のように一所懸命で、家のことはかえりみない人」だったそうであり、「結婚しても新婚旅行に出かけず、挙式の翌日役所に出た」というから、その「仕事人間」振りは半端でなかったようである。他面では、大橋は俳諧の世界に興味をもって参入したが、それは自分の短気な性を矯めようとい

う意図があったという。そうした自己規律の厳しさの点では、前島密の禅宗への傾倒と一脈相通ずるところがあったと言えよう。

【梶井剛 1887～1976】

技術系官僚では、工務局長を1934年から38年まで務め、戦後の電電公社の初代総裁になった梶井剛の活躍が注目される。陸軍軍医の三男として生まれた梶井は、「子どものときからやんちゃで」「乱暴者で喧嘩ばかりしていた」と自伝『わが半生』（1968）で述べているが、父親が職業の関係で転勤が多いため、知り合いの家に預けられがちで、「他人の飯を食うことがいかに身のためになるか」と述べているから、そう身勝手なことばかりは出来なかったに違いない。一高時代はボート部や水泳部の委員を務め、クリスチャンの友だちから、君は「無自覚な信仰者（unconscious religious）」だと言われたほど、友達への気配りは行き届いたものだったようである。東京帝国大学工科大学では、最初土木学科を選んだが、計算がやっかいなので愛想をつかし、電気学科へ入り直したという。「電気というのは、いまこそ計算がありますけれども、計算というよりもむしろ考えることが主なのです。こういう現象が起きたら、その次はどうなるというふうに考えて、それを実験で証明して行く。……したがって勉強も複雑でない。無精者の私はこれはしめたというので、とうとう電気をやることにしたわけです」という具合に、学問の性格と自分との相性を考えて針路を変更する大人びた学生だったといえよう。月20円の奨学金を貰ったため義務年限の5年は勤める積りで1912年に通信省に入り、工務課雇になってみると、大井才太郎課長は1882年入省で、1893年入省の小松謙次郎次官や1898年入省の田中次郎局長よりも先輩なのに、技術者には課長止りの地位しかなかったことを知って、ショックを受けたと記している。梶井たちが工務局を作れと要求したことは初代工務局長になる稲田三之助の項に記したが、その後も新しい技術開発と新技術の国内外への普及のために工務局員は増加し続けた。梶井が1934年に工務局長になった時には、課が庶務課、電信課、電話課の三つしかなく、技術官のための課長のポストを八つに増やす計画を立て、平沢^{かなめ}要次官に要求したが、次官は「困るな、困るな」というばかりであった。そこで「若いものが五、六人こぞって次官室へ行って、大きな声を出してやった〔ところ〕、結局次官が負けて五課をみな通してしまった」という。陸軍の青年将校による下剋上のムードは通信省内部にも波及していたのである。新しく出来た課には調査課があり、初代課長松前重義の下で、研究開発された新技術の実用化のための研究調査を行い、合わせて研究者の人材養成を行った。



し、電気学科へ入り直したという。「電気というのは、いまこそ計算がありますけれども、計算というよりもむしろ考えることが主なのです。こういう現象が起きたら、その次はどうなるというふうに考えて、それを実験で証明して行く。……したがって勉強も複雑でない。無精者の私はこれはしめたというので、とうとう電気をやることにしたわけです」という具合に、学問の性格と自分との相性を考えて針路を変更する大人びた学生だったといえよう。月20円の奨学金を貰ったため義務年限の5年は勤める積りで1912年に通信省に入り、工務課雇になってみると、大井才太郎課長は1882年入省で、1893年入省の小松謙次郎次官や1898年入省の田中次郎局長よりも先輩なのに、技術者には課長止りの地位しかなかったことを知って、ショックを受けたと記している。梶井たちが工務局を作れと要求したことは初代工務局長になる稲田三之助の項に記したが、その後も新しい技術開発と新技術の国内外への普及のために工務局員は増加し続けた。梶井が1934年に工務局長になった時には、課が庶務課、電信課、電話課の三つしかなく、技術官のための課長のポストを八つに増やす計画を立て、平沢^{かなめ}要次官に要求したが、次官は「困るな、困るな」というばかりであった。そこで「若いものが五、六人こぞって次官室へ行って、大きな声を出してやった〔ところ〕、結局次官が負けて五課をみな通してしまった」という。陸軍の青年将校による下剋上のムードは通信省内部にも波及していたのである。新しく出来た課には調査課があり、初代課長松前重義の下で、研究開発された新技術の実用化のための研究調査を行い、合わせて研究者の人材養成を行った。

梶井は、1932年に工務局電話課長に就任した時から、日本の電信・電話技術の自主開発に努め、多くの新技術の開発を推進したが、特記すべきは次項で扱う松前重義による「長距離無装荷ケーブル方式」の実施であり、工務局長に就任後は省内にあった多くの異論を押さえて、その実施を決断した。こうして世界最新の無装荷ケーブルが日本だけでなくアジア各地にも普及し、さらに世界標準になって行くのである。工務局は通信省内では随一の大局となり、その繁忙振りは言語に尽きないほどだったという（梶井剛追悼事業委員会編 1977）。こうした大世帯を引っ張っていった梶井工務局長は、技術系初の次官候補として省内から囑望されていたが、本人はそうした人事はありえないと判断したのであろうか、推薦がましいことを一切中止する

よう命じた上で、1938年6月に辞官し、かねてより交渉のあった日本電気の専務になった。梶井が技術系の出身でありながらトップの座に就くのは、1952年に電電公社初代総裁になった時であった。

逓信官僚としての梶井の自伝などを読んで分かるのは、何よりも彼が通信事業の専門家として正しいと思った自説を貫こうとしたことであるが、同時に幅広い視野に立った社会的・哲学的な見識の持ち主だったということである。例えば、第三次近衛内閣の時に、アメリカの工業力の実態を近衛首相に説明して、対米戦争の無謀さを訴えて欲しいと頼まれて、説明を行ったことが挙げられよう。すでに逓信省を辞めた民間人としての立場からの説明であったが経済人の視点から臆することなく国策の責任者に自説を訴えたことは見事であったといえよう（梶井剛 1968）。こうした態度の持ち主はそうざらにいるものではない。逓信官僚論で著名な進藤誠一は、梶井が工務局長になった時の南弘逋相の言葉として、「今の本省局長の中で一番あの梶井ね、あれが偉いように思うがどうかね。技師だというけれど、あれは政治家だぜ。あの猫なで声をしてやさしそうな顔をしとるが、あれがくせものだぜ。今に屹度えら者になるぜ」という言葉を記憶している（梶井剛追悼事業委員会編 1977）。梶井家の応接間の書架には内村鑑三全集が並んでおり、内村の思想に共鳴していたとのことであるが、他方では、梶井のエートスは「東洋的儒教的」だったと見る部下もある。総じて梶井は近くの者に一種の暖かい宗教的な雰囲気を感じさせたのであり、筆者の父親の葬儀に際し、元上司として葬儀委員長役を申し出てくれた梶井から受けた印象も同様であった。

【松前重義1901～1991】

最後に、1925年に東北帝国大学工学部を卒業して逓信省に入り、長距離通信のケーブルについて世界の常識を覆す新技術を開発し、1941年に工務局長になるが、東条内閣の倒閣運動に加わったために召集されて南方戦線の死地に追いやられ、辛うじて生還した松前重義について触れよう。

松前は、1901年に熊本県大島村の村長松前集義の次男に生まれ、熊本高等工業を経て東北帝国大学の工学部電気工学科へ進んだ。指導教授には人気が高く多くの学生が殺到する八木秀次教授を避けて、抜山平一教授を選び、流行らない真空管をテーマに、騒音を避けるため昼間は寝て深夜に実験を試みながら、教授からは一対一で「いやというほど鍛えられた」（『私の履歴書』第31集、日本経済評論社、1967年）という。八木主任教授からは大学に残るよう奨め



られたが、若手の研究を妨害する教員を見て誘いを断り、八木教授のいう「逓信省というつまらない役所」を敢えて選んで就職した。当初は現場の見学という「単調で無味乾燥な職場の空気」に失望した松前であったが、高円寺の同じ下宿の友人に誘われて内村鑑三の聖書研究会に通ったことで、生き返った。「先生から受けたいろいろな感化は、思想的、宗教的にも、また、教育、政治の面においても、すべて私の土台となり、生命力になったと信じている」と、松前は回顧している。

しばらく長崎郵便局の電話課長を勤めて、1928年に本省工務局に戻った松前は、当時日本にも導入されつつあった長距離通話のために一定間隔ごとに装備線輪を差し込んで電流の消耗を防ぐ装荷ケーブル方式に疑問を懐き、装備線輪を取り去って無装荷とし、電流が弱まったらエ

レクトロニクスを用いた増幅器で補うと、複数の通信もできて良いのではないかという無装荷ケーブル方式を提唱し、後輩の篠原登の協力を得て実験を進めた。ヨーロッパ留学から松前が帰国した1934年の逓信省内部では、日本から「満洲」までの長距離ケーブルを装荷方式でゆくか無装荷方式でゆくか論争中であった。梶井工務局長は、松前・篠原の提唱する無装荷ケーブルを思い切って採用する決断を下し、1935年から1939年まで掛かって東京・ハルビン間三千キロという世界最長の無装荷ケーブルの敷設を完了した。

こうして松前は、日本の通信技術を世界的水準に引き上げるに止まらず、それを凌駕する水準の無装荷ケーブルの開発と実用化を行った点で、敗戦前の通信技術官僚の優秀さを世界に示すことができた。しかし、技術系官僚が官僚制のなかで占める地位の低さはなかなか改まらなかった。松前が語るところによれば、「理由は簡単である。技術者に実力がなく見解がせまいから、行政の権限をもつポストにはつけられないのだ。局長にしても局に与えられた行政を完全にやっていけるだけの視野の広い人が技術畑から出てこない。技術者教育があまりにも専門的、部分的になりすぎたために生じた欠陥である」（前掲『私の履歴書』）という。このような認識が、戦後に松前が中心となって東海大学を創設する伏線になったのであるが、必要な広い見識をもった技術者の養成運動を松前は早くから行っており、その動きは時の政府から「アカ」と見做されがちであったという。松前は1941年から逓信省工務局長になるが、1943年に中野正剛らの東条英機内閣の倒閣運動にコミットしたことから、翌44年7月には二等兵に召集されて危険な南方戦線へ送られた。東条内閣総辞職にともなう報復人事であったことは間違いない。幸い友人たちの救援によって45年5月には松前の召集は解除された。

③ 「仕事人間」を如何にして超えるか

以上、明治期から昭和戦前期にかけての郵政官僚の中から、限られた人々の生き方を追ってきた。それらを通じて共通することは、大橋八郎が稲田三之助を評して、「仕事の鬼」と述べたことであろう。稲田をそのように評した大橋自身が、夫人に言わせると、「仕事のことにはもう馬車馬のように一所懸命で、家のことはかえりみない人」だったというから、逓信官僚のほとんどは「仕事人間」たることに誇りをもっていたに違いない。そうした仕事振りは逓信官僚の元祖前島密以来のものだったようである。前島の仕事振りについては言及を省略したので、ここでは前島密（1920）所収の「熱海の執務伊藤侯を驚かす」の一部だけを引用しておこう。

「爰に熱海の旅宿で伊藤侯が翁の勤勉に驚いた話がある。時は明治十二年十二月二十九日と云ふ歳晩から翌年の歳旦にかけての事である。普通誰れも遊樂を貪る時であるのに、翁は此期間を利用して其頃起らんとして居た海上保険会社の規則編成の取調べを心掛けたのである。此時取調上の必要から当時の管船課長塚原周造氏竝に海上保険会社の暁其支配人たる益田克徳氏外に属僚数名を伴ひ、陸行熱海へ行かんとした。恰も良し伊藤博文君三菱会社の汽船和歌浦丸に塔じ同地へ避寒の為に行かるるに会したので、同船して直に熱海に赴き湯本半太夫方に投宿され、翌日早天より宿屋に事務局を開き、執務を始めたが数日に互りてなかなか繁劇の事であった。元日の朝伊藤君フト翁の旅宿に訪ね来られた所、翁を始め一行数名机を連ねて、脇目も振らず事務を執って居るので、君は驚き匆々に立去られたが、実は伊藤君は碁を囲んだり詩の唱和でもしようと来られたのであった。然るに右の如き繁劇の光景を見て「御邪魔をしてはならぬ」と帰られ、且其後翁に向って君の勤勉なるには驚き入ると称し、亦人にも屢々語られたと云ふ」

日本では週休制が1874年に官庁にまず導入されたはずであるが、この前島の元旦も抜きという働き方は文字通り時代の趨勢に逆行するものであったから、伊藤が驚いたのも無理はない。通信官僚の元祖のこうした「仕事人間」振りは、恐らく通信省の伝統となって行ったのであろう。もっとも、田中次郎の項に紹介したように、働き過ぎて倒れそうになるケースもあったから、どこかで歯止めを付けなければならないという意見があったことも事実であり、電電公社総裁になった梶井剛は、辰野隆との対談で、「何か楽しみがなくて、人生を送ろうといっても無理なんだ。まじめにやろうと思えば、どこかで息抜きをしようと思うのは当然で、それにはスポーツ、音楽だ」（梶井剛ほか 1966）と述べている。しかし、問題は、そうしたりフレッシュのための時間を確保できるような仕事のあり方を通信省時代の職場が提供できていたかということであろう。とくに1929年に立憲民政党を与党とする浜口雄幸内閣が成立してからは、通信省も経費削減を求められたから、合理化へのインセンティブを高めるには、特別会計を導入すべきだという意見がそれまでに強まった。大橋八郎次官の時に、その願いが達成されたことは大橋八郎の項で触れたが、それは依然として8200万円以内という巨額の上納金を年々大蔵省に納めることが条件であったから、現場の仕事がゆとりをもてる余地は乏しかったであろう。

本稿で問題とするのは通信省でも局長以上という高級官僚であるから、現場一般とはやや事情が異なることは言うまでもない。彼らに求められるのは、専門的知識の高さであるとともに多数の部下を指導しつつ組織全体の活動を高める統率力であり、そのために必要な人間としての品格であった。その点で関係するのは、彼らの出自であり、専門的知識の習得と同時に指導者として必要な教養を身につけるための経済的・時間的余裕の有無であった。本稿で取り上げた高級官僚の多くは、そうした機会を持つ余裕のある恵まれた環境が与えられていたが、人間としての教養を身につけるかどうかは、単なる経済的余裕の問題ではなく、本人の努力の問題でもあったから、専門面と教養面の双方において十分に能力を蓄えることが出来たものは比較的限られていたように思われる。例えば、「前島郵便」に代わる近代的な「坂野郵便」のシステムを見事に開発し、日本郵便史上の「中興の恩人」とまで言われた坂野鉄次郎は、その名人気質の故か部下に恐れられる存在となり、「仕事人間」の限界を残しながら通信省を若くして辞任したのであった。

その意味で、最後に問題となるのは、身につけた専門と教養の質が如何なるものであり、高級官僚としての自らの地位と能力を、何のために用いたかということであろう。田中次郎が回顧しているように、官僚としては勅任官の地位にまで昇り詰めることが目標であり喜びであることは分からないではないが、真に問われるべきことは官僚として日本や世界の民衆のために何をなそうと努めたかではなからうか。その意味では、自らの専門的能力に基づいて選択すべきだと考えた方向が、時の政治家たちのそれと異なることが分かったときにも、自己の良心の命ずるままの態度を貫く勇気が求められていたように思う。そしてアジア太平洋戦争期の通信官僚の中には、そうした勇気の持ち主が少数ながら居たことは銘記すべきであろう。

〔参考文献〕（引用順）

- 石井寛治「幕臣たちの文明開化」『郵政博物館研究紀要』第10号、2019年
 石井寛治「文明開化の担い手たち—前島密の位置」『同上』第11号、2020年a
 石井寛治「三等郵便局長の経済的地位」『郵便史研究』第50号、2020年b
 石井寛治編『石井家の人びと—「仕事人間」を超えて』日本経済評論社、2021年
 石塚裕道『日本資本主義成立史研究』吉川弘文館、1973年
 田中彰『日本の歴史④明治維新』小学館、1976年

- 山口修『前島密』吉川弘文館、1990年
瀧井一博『文明史のなかの明治憲法』講談社選書メチエ、2003年
若月剛史『戦前日本の政党内閣と官僚制』東京大学出版会、2014年
井上卓朗「前島密の思想的背景と文明開化」『郵政博物館研究紀要』第11号、2020年
田原啓祐「幕臣前島密がみた文明開化の礎」『郵政博物館研究紀要』第10号、2019年
前島密『鴻爪痕』財団法人前島会、1920年
岩崎家伝記刊行会編『岩崎弥太郎』上巻、東京大学出版会、1967年
坂野翁伝記編纂会編『坂野鉄次郎翁伝』通信教育振興会、1952年
田中義次編『田中次郎』田中義次、1932年
梶井剛『わが半生』非売品、1968年
進藤誠一『逓信事業と逓信人』逓信文化社、1960年
稲田三之助伝刊行会編『稲田三之助伝』電気通信協会、1965年
有竹修二稿『大橋八郎』1970年
石井寛治「通信特別会計成立に関する一考察」『郵便史研究』第30号、2010年
梶井剛追悼事業委員会編『梶井剛追想録』電気通信協会、1977年
『私の履歴書・松前重義』第31集、日本経済評論社、1967年
梶井剛・大橋八郎・米澤滋『三代のころ』東京出版センター、1966年

(いしい かんじ 東京大学名誉教授)